處女七種

へ 13
3227
4

門 へ 13
號 3227
巻 4

加尾利奈浜

昭和十年七月四日 購求

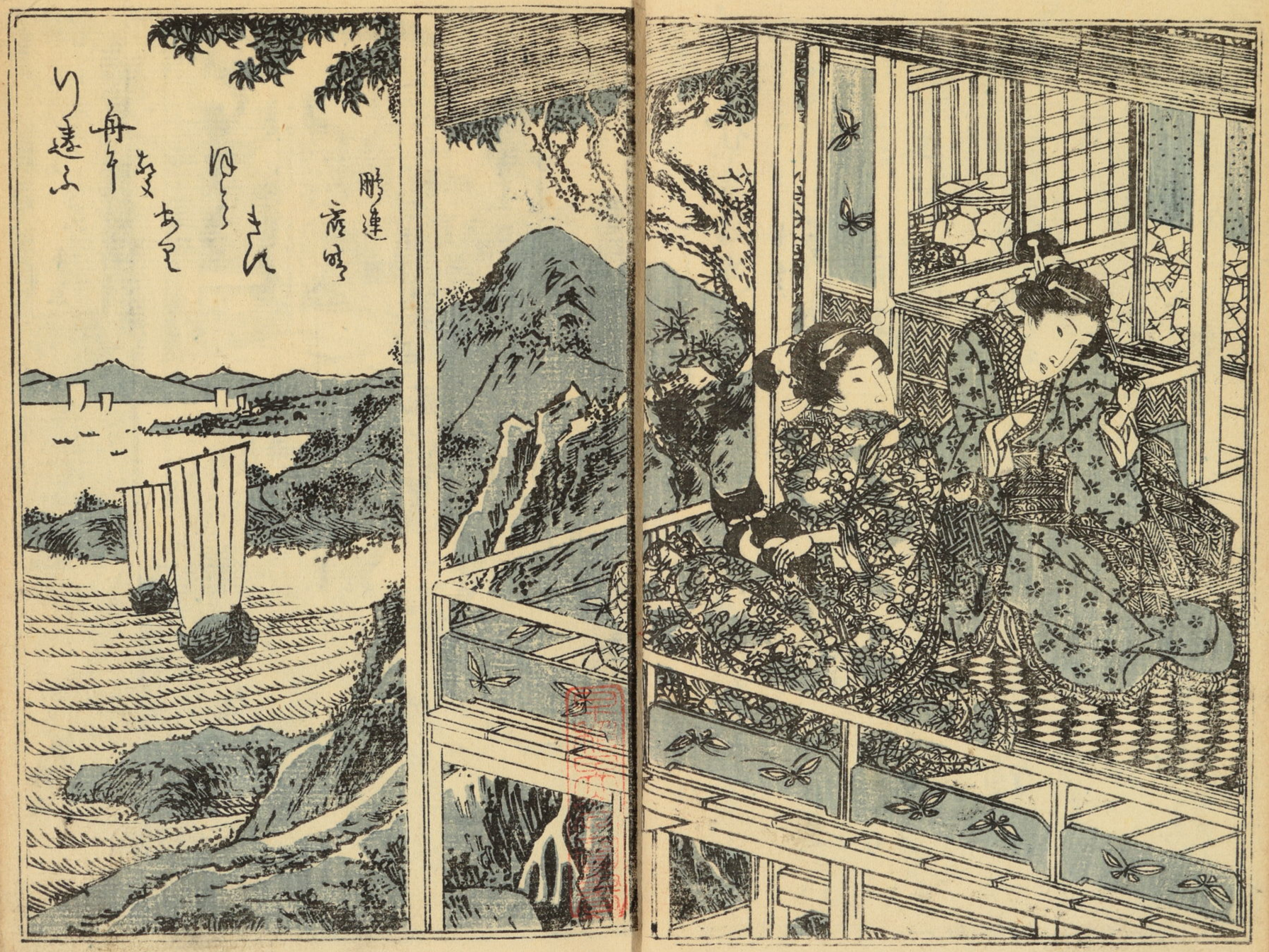
處女七種の序

雨歇蘆篠煤晴生新月故人雙眼
明々蒸ゆ蛍ふ一山の洞あるを伯を
元来姓を乃ち千種のをなかむより世間
持處女ゆゑ新秋のやさしきに花を浦へし
花に枯梗に女ゆゑ自然なる美女

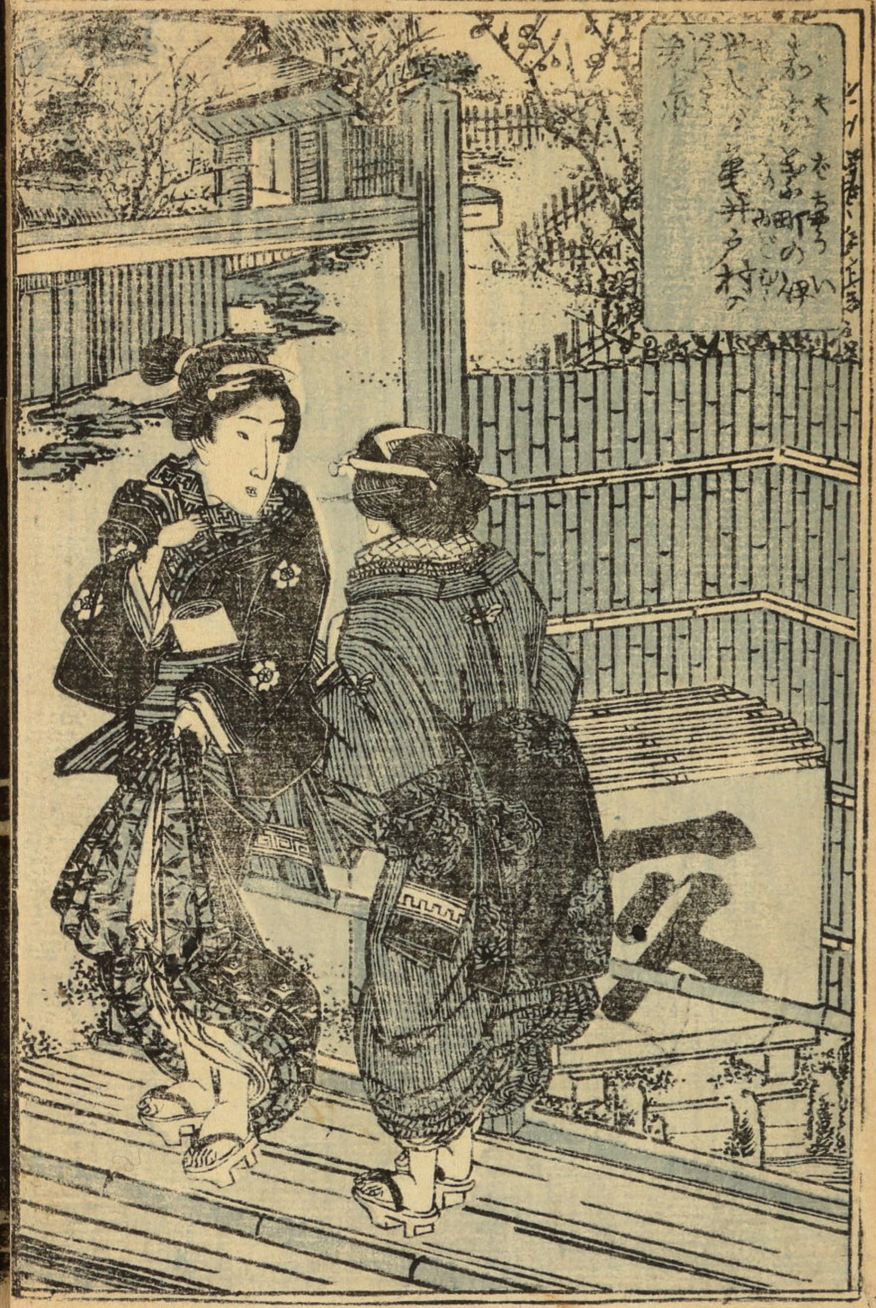
各と十劉なんと思ひ立しは烽の空
寥りやまおさは人心まとりていふべき事
なしにこと作者に變化し同在をなりして
此後如何と二編と編素人にもやく
推量なせしまぬ様に眼前なかんに新奇
辛苦のこと味あまだ最初なる嚮人に

入むとこそ更に案じ故忽地と頭がさゆく
様関の模様にしたる其次にしたるは
大に序に説初し主意にかしるも事乃
筆にて唯あらぬ所のまゝ頼に
こそ此事也

江戸　狂訓亭　為永春水誌



東葉



秋色
艷麗

處女七種五編上之巻

江戸　爲永春水編次

第廿五章

[illegible]

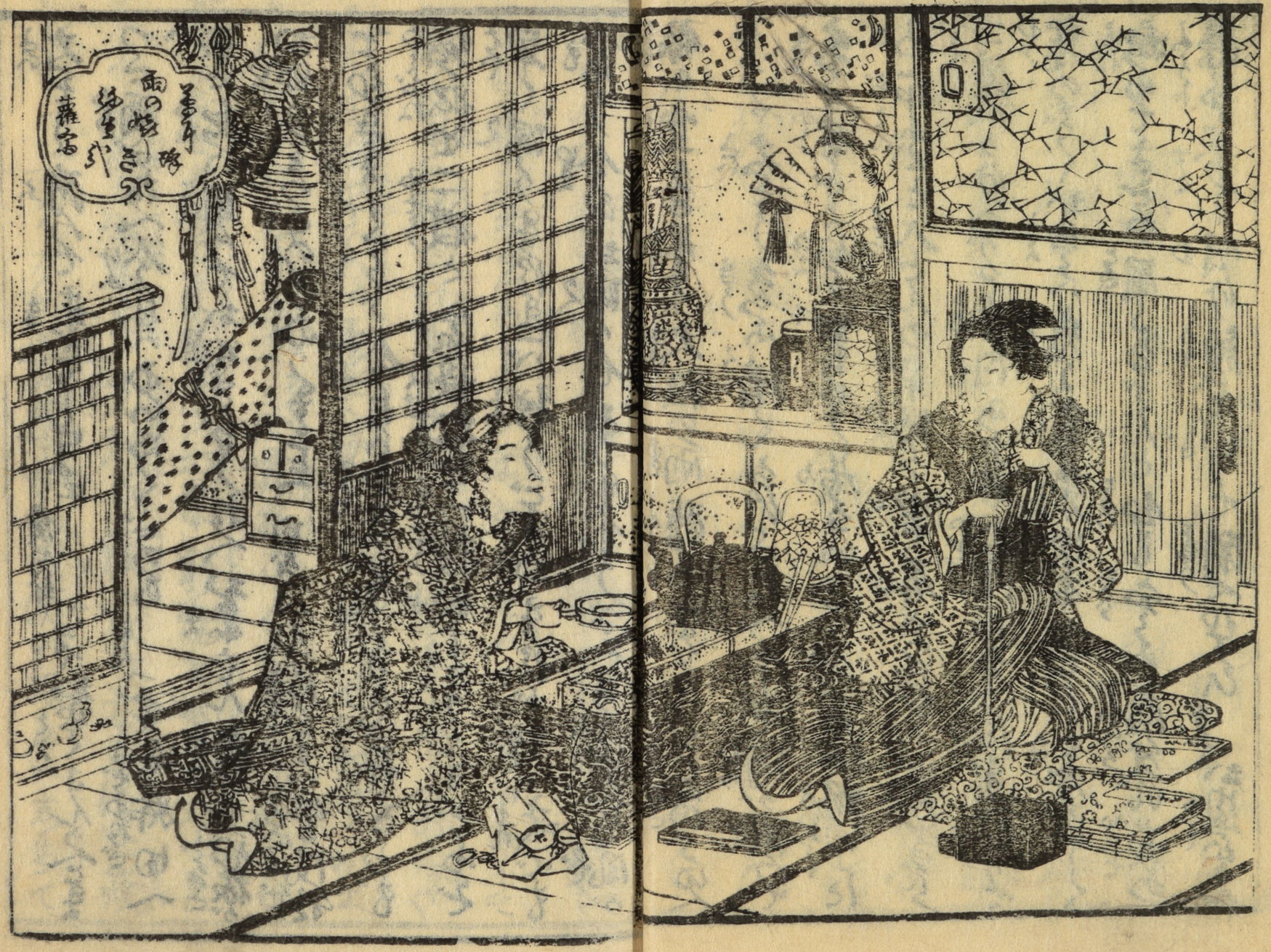
可笑さうな所や哀れな所がありやすぜ。よし「ヲヤそうでありやすか。讀
本とやらでござりますネ。ろく「アノ好文舎とか云ふ為永の弟子の作ぢョ。よし「
稗史きやら、そんな本ハ嫌ひだから操ひぢョ。夫よりか言付ヶ寝島ろ
梅の春ぐの作る。出来やす狂訓亭の弟子の春栄といふ作
者の著す春色一百まるとといふ人情本なんぞが当世だらうが
著述でありて能ハ。ろく「ヲヤ左様かへ。言ぐらゐでもいきなぐ
讀んでみたいやうに著でありはへ。住はこの婦美川のてふやうなのを
皆の言葉を直してあるからどんなに面白いだらう。さよ「ヲヤ
夫じやア面白いねヱ。貴婦さん私が直に讀でお聞せな
ろく「アノ手めへの讀ましが嘉喜でも讀るが。さよ「嘉喜姉
でも何でも讀から。ろく「そしてお客もたくさん来るのでヨ。ちよ「ヲヤ
大そう言直いよく御覧なさいまし。ろく「それだから讀むと
粋が言ひしるのをそして当世な所やまた婀娜な所が
あるとおもひきや身に染て惚気ができて困るヨ
夫だから餘ぽど讀ちんを余計に仕たいひどい合ひ
ハおほほほ。さよ「アレ否な千寝さんでございまさあ。お茶ちやんぢやある

まつひしーあーーーー　ろく「ヲヤ否ヨ　此身が何時恍惚とあらが
あるエ　まよ「アサ　志ふをお切りでなひヨ　一昨日の晩なん
ぞも　義さんがお出の時　お茶たんがまつくどんなでありま
志ころう　婦上さんごと思ひても悔ひやうでありましたハ
ろく「ヲヤ　殊加減な　事を言ヨ　此嬢ハ　まよ「あーーードレ　交なら
紫をついで　お茶の方を先に仕やうヤト言なから　狭羅を
火蓮の真中へかけ　まよ「チョウト　貴嬢さん　此るお屋さ
から頂いたわさの去羅でとらへて見やうエ　お茶が大造

見出るといふ　ろくこ「アく　左様して此後去羅が小い
から意度お茶が味いヨ　まよ「手　お茶を　逢ぞに上てたれ
エ　ろく「紫さんにか　悔かしい　獨りで　恍惚て居るヨ　まよ「アサ
左様じやアなひヨ　ろく「そんなら　逢にご立やうぞ　紫さんご
母ヲサ　まよ「ヲヤ　紫さんとゆへば　今日ハ　お隣の勇さんの
お客に　誘引て　婦国の　沖の　獵漢に　お生ごろこそうごが
大そうに　帰りが　遅いエ　寃う　七時の　至　齋食ハ　先刻
来たのに　ろく「左様サノウ　帰りハ　意度　こちら人　来た成

苦ごらうノウ　よく「てお隣のお客と一所に是非ちら
ち人帰る約束ごヨ　ろく「左様ニアノウ栄さんハあんな
細や狗に往なすることハ嫌ひじやア　ないえ　よく「アく今
鶴も来て言ふまるにやア　自己ハ居ごけまども且那
元の口侍ごから仕方がない晩にやア　志門りお去居を
忘れて来ると笑ひながら　お出ごろけヨ　ろく「早く帰んな
すまじが往のう　暖ごとハいふじやう　まご朝晩ハ重ない
から遅くなると祝じやア　よろぷど寒れヨト　ふようち

様に空うき墨り大粒の雨　隣子にぬぐらくと歯る迎人
よく「ヨや大そう急に暗くなりこねんそして雨が落ちて
来さ様ごよなり出ちやア居るいうエ　ろく「あこ二物干に
小布衣と八どんの単物が出て居ろけト　ひひながら
二階へかけあがる雪内にすもや大降になり風さ人乾りて
嵐のごとくお出ハ兎に角栄次郎がことも気づかいしく
祝にてさぞや風るならんと　私も宅に落付ぎ表の
隣子をおくし明け顔を出して隣人むかひ　よく「お内心さん



藤内女房「ヲヤお豊さんかへ まア
大そう濡て来ましたネエ 豊「アイ 姉田へ
つて雨ござねへ今日ハあいにくでの
出かけた船ハ困りておだぞれねへお杉さん所から殿様が
お迎ひをまちくたびれてゐるのでありますネエ 内女「ハイ亭主も今朝ちつと風邪
を引ましたから今日ハ参りませんでしたけれども
網船を二艘と家根船を一艘出しましたよどうぞ
早く帰りますれバ能うござりますが 豊「夫でも
宅も今に帰りでありませうネエ ヲヤくさんぐ風が

強くなるヨ 御覧なへ ト言ながら障子を立る 豊「サア
お湯が煮えたから お茶お菓子を入て お呉なさいヨ そして
ちつと早い様だけれども夜食のしたくをしようじやアあるまいか 豊「ヲヤ
あんまり早いねへ そして景さんが帰りてお出だといいが
家があぶないから 六「左様サ夫じやア吹こむ
から表を立て来るから お前お茶行燈を出しておくれ
そして お茶が出来たら先刻の残りの本の後を読んで
おくれヨ 豊「アイ アノウ 姉さん 二階の雨戸を閉て

お呉久　ろく〳〵今あめて来たヨヤ。寛う此戸ハ居る
戸ごヨ自己獨りの事じやゆ志まらるひヨおあらハ何を
あて居るごらうノウ　よく〳〵子エ和歌町まで往つたに
仕ちやゆんまり永いチエドレ私が手傳つてあげるから
アレサ半蔵さん上がなさまらるひからごハチ来ゝゝゝト
友個がらまにて漸く表の戸を志める打から此家の
私頭八といふ男私を河岸へ津まぎ手暖と布袋を
差しを友方の手にもちながら内へかけ込ゝ　八ア〳〵

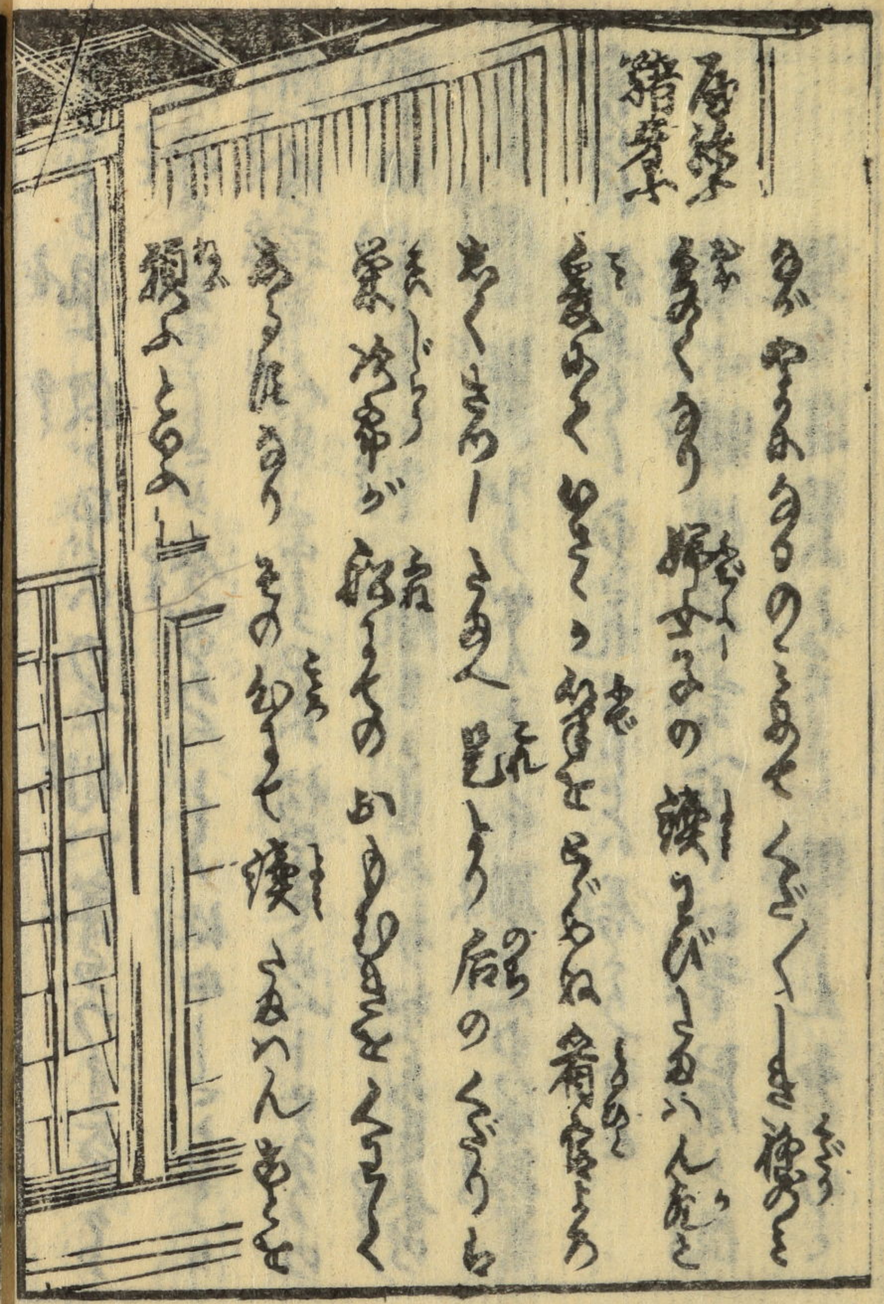
六へんな雨ざ　ろく〳〵ヲヤ八どんか但苦労ゝゝさぞ雨で
おぬつたらう　八〳〵エイ寛う風がつよいので臆がきかな
くりて寛にとまりましたイヤ私が困りたハ誰が今
久寿田鴻の方から来た小私の私頭が喇叭したが
此風で沖へ出た私が今又古艘ひつくりかへりたと
いふとつてありましたが栄さんハまだお帰んな風ハ
仕ませんかへ　ろく〳〵エなんごとエ沖で私が加へりたと
かエ　よく〳〵サアく大へんごなエひよつと栄さんの事で

お主の私じやア なのう八どんどうぐさらうノウ 八へヱ
そまじやア まぐ栄さんも 隣の私も 帰んなさつやア
仕ませんのうヱ ひよつと此風に私がひろくり返つて
目にやア 大体私の縁を知りて居ても波がひどいから
うなやア 仕やせんどふぞ無縁でお帰んなさつやア
能が よへ 半嬢さんお周ヨ ひよつと栄さんの私が
ひつくりうへりて お尼なまたい 栄さんハ私の縁ハ知らぬか
よしんバ知りて居るにも 志ろ 今も八どんのいふ通り

此風じやア 何所へ吹すがさまるか知まやア 志なれ
ねへ ろくへ左様サ のウどふも此様に帰りの違ひのを
見ちやア よへヱ ろくへナアニノ 隣からも別さ私既気が
大勢往さ もんどうら別条ハあるまひ けまども何
様も帰んなたらないうちハ案じらまるノウ 八へお茶
さんがさア 左様だより言りて内であんじて居なまつ
てもたじまりやせん 私が濡つゝでに此形でそこら
まで往りて見て来やせう ろくへとふぞ此苦労なぶら

左招して呉なさうさるると自己も此腹も安さ
さるから八ヘドレそんなからちよつと往りて来りや
志やうト言ながら表へ出やうとさるおつまから
隣の門口発くしく簑笠着る獨りの船
所あハさぐし乱にさしまゐり　お内義さんく
大へんぞぜお前さん所の船が一三艘ながら ひつ
くりかへりこのを今私が見て来やしこから為渡
お知らせ申しやに私もこまけやうと思ひこ

けれども見ば波がひどいので側へ寄りつまるいから
見捨て来やしこが今ぶあいどうか仕やしこらうか
所淦私も人もこまりつまい仕やまゐんトまゐりの
御しかゝ寄るお客お帰もともに折おどろき余の
ことに洞も出ばだうぜんとして頻見ゆいせ物をも
言ハば猶ぶし申されてとまれ居たりけれ
春水頻げいて言へどくお客お帰が泣
無を這里に くさしく鍛ぐんあいいと



屋棟の
豬葉

ゑがやうにゐるのこゝめて くぐくしき 德のこと
ゑめくなり 婦女子の 嫉しびしるはんあと
愛めて ゆきて かぎをひぐめね 肴宮よりの
しくさわし ことあ人 見より 后のくぐりも
業 冷帝が 船ゑてのおもひきをくらく
あるに なり その 幼まで 嫉 ことはんあとを
頼ふとゆふ

第廿六章

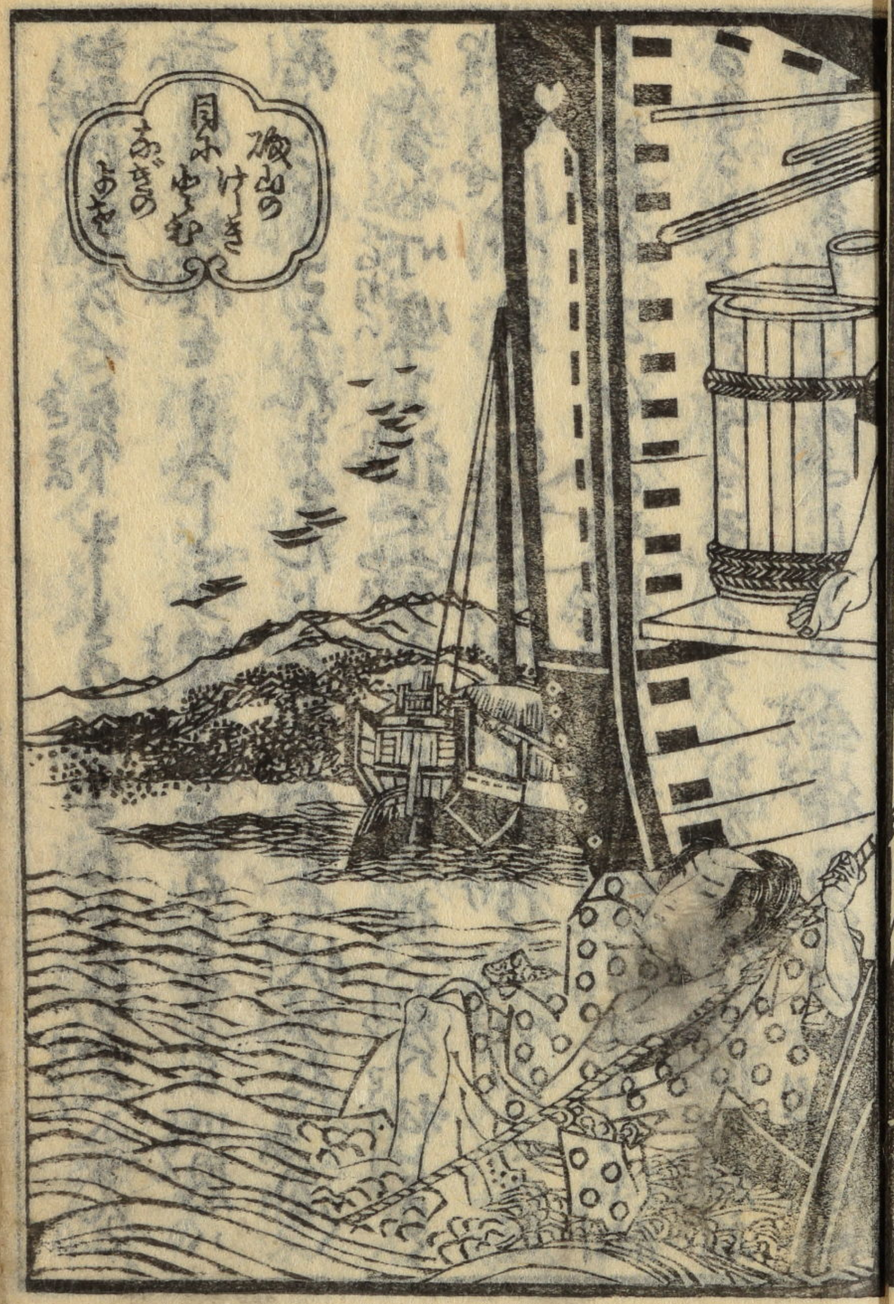
此所は伯浦の室のねど 千里通境の青海原 船の返回
は真帆あげて 沖へ 雲行 大船の然もゆさまして 走り
あが 機に風雨に 荒波あらり 逆巻 汐のさゝみじく 雷至
登るゆきろしき 如何なる 大船なりしても 見せぐに
手後もあらず 歩寄る 波は山の如く 船を 宙天に 喫上られ
見えたれども 急延に 千尋の底へ 落げ 下ひしく 嵐の音ハ
雷よりも 猶とげしく 船の 危きるのハ 筆にて 尽し

実ハ老のげめエトおもひやしたが　「イヤ宛う船頭さん
達の大骨折で先ハ無能でおんな嬉しひことハあつまぬ
せん　船「イヤ　お前がたより私どもが大鶴びざサア　船子
どもヤイ　船魂様へお神酒をあげろヨそして追風に直さ
から八重帆を掛ろヨ　のりこ「モシく　船頭さん此所ハ何処
辺ごろう子　船「左様　サ子　向ふに見へるのが伊豆の大
鳴サ子　のりこ「ハテ子　そして今我ハ何所らまで巻んな
さるエ　老人のりこ「コレサ　船じやア何所まで巻るの何所とも

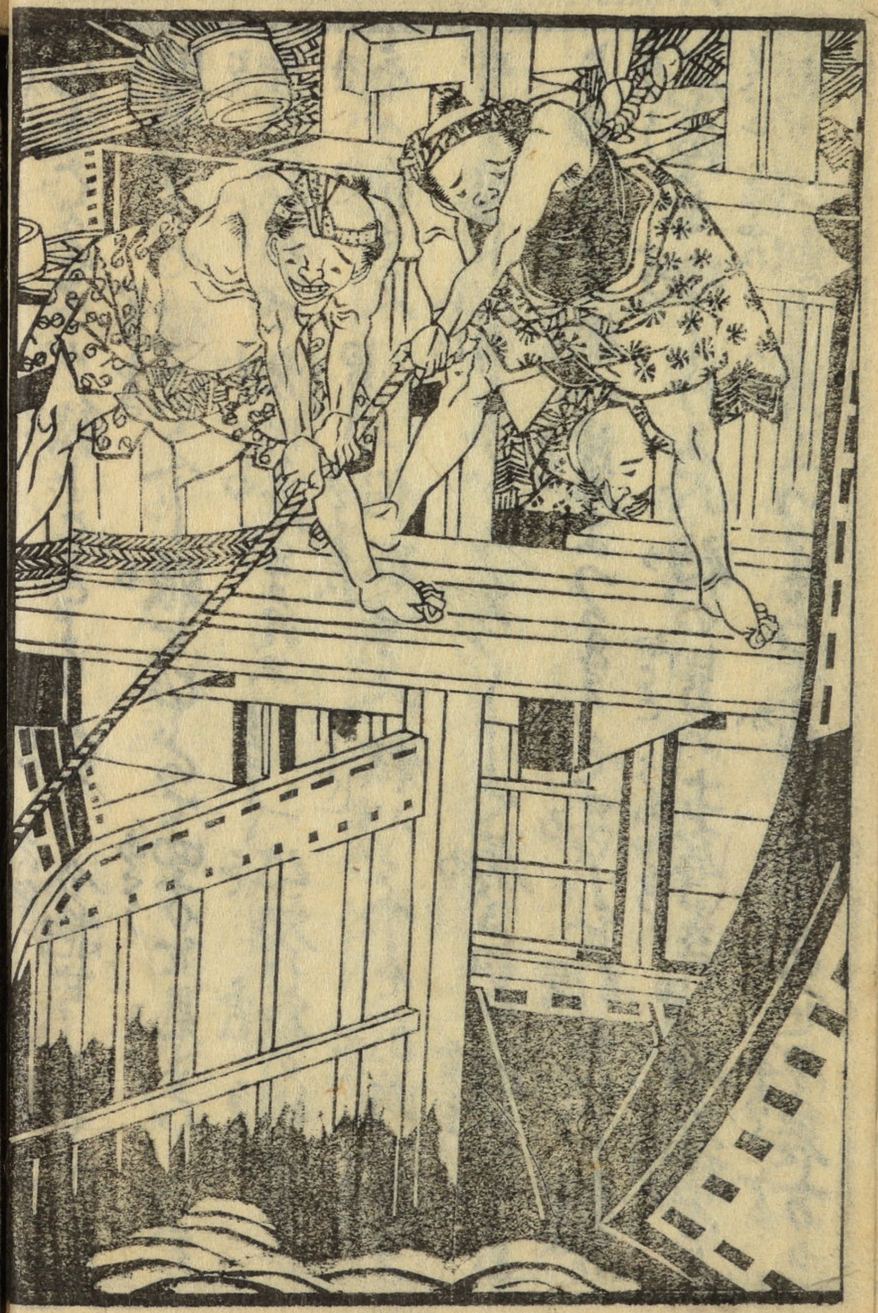
行のといふ度ハ言ハねへもんざヨト　坐しの折から船の
葺の方にて男の聲「アレく助け　船エ引く　トさも表
なる聲にてきけば者のありけまバ船頭ハ吹付て　船「ヤく
解元が静に仕なさい　葺の方で人の泣聲がするぜト
言折から又もや男の聲「ヲイく助け　船エ引　船「アレく
又聲がするト言ながら元来実意のある船頭ゆへ船
縁に立ち四海を見まハし　船「ヨヤ此処ごく若い男が
葺に座り取ついて居らア可愛そうにドレくあげて

出りませうト言ひて所が矢を射る様に走る船ぞろ
小船をおろし友も出ませぞト言ふぞら側に在し碇綱
ちりをあげて出り 船「サアく」お前此綱に志つかつまんな
せい引上て出るからト大勢がつまゆて潮上へ引あげれば
男は汐にもまれしう人引あげらまて如ゆるミハタと倒れ
まて嗅絶まバ皆くとれハとお騒ぐを船頭はおし歩「出」
寛平形う引あげさう大丈夫ぞ誰しもうふとき
気絶するものぞなんでも火を焚て鞍をあぶ川て呑ぞ

汐をたらせるが絶トとまより急く介抱せしゆぞ指半
時ゆどして嗅吹く人眼をひらいて四方を見まハし 男「モシ
愛は何所で乗ひ座まほ工 ミまく「此処は船の中ぞョド変
気が付さう人 男「工何船ぞ人 船ハどふして此所へ乗り
ましと言ふぞらうろくして居る内に船頭ちじ
ミなく口を探へ葺につるまりて居しを引あけし首絡
尾絡を出しけまバ彼の男は去ぬるき 男「工左様なら
船が此船の葺につるまつて居りましたのを半巻方か



飯山の
けしき
見ふ
ゆゑ
あぎの
よせ



お助けなさいて御下ましたのでござゐまたか実になんと
言いてお禮をもふしたら宜うござゐませうか四恩ハ
死んでもコチれませんト手を合せて伏おがめバ私共に
そんなに叮嚀に礼を言なさる事ハ私ども
今の風であやうひ所を神仏のお報で助かりたのご
からお茶をしすけたのも日頃お茶が神仏をあんぐ仕
なさるからござらうヨそしてこの人お茶も今の風で私私
でも仕なさいたのごらうが全体何師のお人でまた

何所から流れて来なさいたのごな　男へハイ私ハ元嫌会
の佐金町辺に居りまたもので名を栄次郎ともふし
ますが今日金櫃懸意の人に誘引まして姉田
の沖へ漁獵にまゐりましたが俄に大風で船
を漕返そうにも三里ばかり沖へ出て居りまたもん
ごらう艫も竿も利ませんしそのうへ海が真暗に
ありましたから何方が山ぐら岸ぐら知れざり志その
内に大涙がまゐりてとあくし私の連の私とも三艘

ながら一所にひつくり返しましたト
思ひましたが手後のるのハ一向に覚へ
ませんまし祚松のおもゝさんでおんぞ此船の
葺にのりまつて居りましたのをおもゝさん方の
お情で船やりて助かりましたれんに
とどん花の春に合ましたとやらで
社内産ませう　船へ八テ子史ドやおもゝさんハ
鎌倉のお方で栄作さんと社師と立

史つまやかたや此船へ助けて手のせるのふしたい
往が船のに追風ドやか漢人船を寄ることハ
仕ゆくし手上宛う縁倉の地をさるかに
さるまさから困りたものだ　栄へナニ宛う
船やりてお助けなさつて社下ましたと
上にそんな所に起いの所を用で社内産
まれ何所でもお船の若さ所から
あがりまれから史つまやかそうと只今縁倉の

地をたるかに放きてこと在作ましたがどのくらゐ
たるまでましたらうよ　和へ左衛門完う
彼見七拾里も漢倉から走りやしと
らう　栄へ工そして此所は何所ぞどこゐ
まだ　和へ遠江灘ヤ　栄へ工　和へアレ堂ゐ
甘い何所ともなしに波音が仕やまどこらう
アレが左衛門の七不思身とかもかしやはるんと
和へたるやいものサネアハ言はまそハッと

あれどうきしがせんまべるき侵ばんぜんと
さし傍向けく中々ばし物をも言ハば
居るうける

此時の栄次郎が知らるべし
甚身の難船にあひしるを漢倉
にて將を使ひ家内の者ハ言ふる
あるいだとお家お堂が歌きのかといひ

次々の巻をよみせよ人と頼ふのこ

秋色艶麗 處女七種五編上の巻

秋色艶麗 處女七種五編中之巻

江戸 爲永春水編次

第廿七回

そんにとて。とまれバかゝる。斯まれバ。あるいひしらぬ。あふさ。まる
さに世の中のありさゝ むかしも今も詮方なきものなりおもへ
おとうるいねバこそ浮世とハ能あきらめさ無理なことハ言き
長唄の寿ハ尤の人情にて滞めて仕舞といふハ發明の子嘗
悟りといふよあるべきなれど夫でハ何根やら情もなく寒の

誇るきに等しかるべし別て男女の契りかわし中ハ善きに付け
悪きにつけて思ひ合互に言はねど千代万代と誓ひて居る
あいだから実の情といふべきか然ばとて又身勝手に愚をつら
ぬるも堪忍ハ浅ましき所為にして親兄弟に不憚日
毎の勤あるも打捨て自由をするハ勝手がましく他の謗も顧ず
かしこの操を譲り守り歎きの中や嬉き月日を数へて辛
防し末の雲山浪とさぬ縁つれし主の性根といふに不断意
のと悲しひのと嬉しきを吉がましるので思案の外の楽しきを

あることハ前にしるしたる通り一家に織江町の名を呼ぶハ崇次郎の弟を
安けど朝夕歎きを悲しめども姉に大恩請し身にて今漸
やうやくにおもしづく甚恩返しも出来かねる所存の勤め日傭の
お客に呼るる家業をおろそかにせざるべく義理にかかれば
姉へも孝養の無理元気泣ぬ顔して稼ぐる客先の評判
他に勝って流行ハ辛苦の甲斐あるべし今日も頼まれし杉坂の
座敷ハおろくも大一座お客もお敵も贔屓から落合誘引
逆鳴杉坂を出で船を催しそれより堤を遊び行野西せの

詠めも奥なるなくさゝ

客ハ真次郎 後次郎 嗔女ハ千代吉 霧吉豊吉 平

人の娘二人など

千代へ 真さんト小夜のまていふ 真へなんざ 千代へお前さん来月

田舎へ立てお出の時ハ別いふ様な道だろう歩行てお出を成

のごらふ子エ 真へ十二斯いふ好意な路を通るのならバ宜が

奥及御送ごろう迚もよくハあるまひヨ此所の道なれバ

おそ此様に草や木の枯て居る時節が又面白ゝもある

様ごけまども此方の行方ハあんまり面白くなひ此じが

種々とむづかしいつたけがあ門て行のごろう詮方がなひハナ

子 手様な古文をとてで言出さぬとも能じやなひか 千代へ左

様ごけまども お前さんハ脱洒田舎へお出を成のが苦労に

ならなひ様ごものヲ 真へ十二苦労にならなひ古文があるものヲ

夫ごろう先刻の相談の様に仕様といふのヨ左様思門て

居なく子 手様な古文をとてで言出ると元人に知まて悪ひ

から何にしても機嫌よく何古文も他人に推出されなひ

根ふしみそして今歩まこ例の宅まで出て来て呉な
其時よく此しを仕根じやアるひうトいへバ千代吉ハ
眼ハ涙をうるめ　千代へアヽ丈ごうら手ゑ気で居まれよト
小姿ふてたまし行　脊後より最次第　最へヲイヽ千代さん
火を何根しこ消て仕舞ちやア行るひゼ　千代へアレサ私
ぢやアるひヨ霧吉さんく火を何根社成ごねへト先へ
行しを呼かけるゆゑ霧吉ハ振向て大きな姿で　つるへそれ
ごうても今早豆競をしこ第　烟愛を落して消して仕

舞こうら詮方がるひハネ　真へおそろしい大きな姿ごぢ
くりさるヨ　最へそして誰ごう火手を何所へ出して仕
まつこうら行るひゼ　真へ宅ハ何根もいこづらゆ児を
大勢連て来こうら行れ人そしてお琴ぢやお渡さん
るんぞハ何根しこらうノウ　千代へ十二　私所さんと早豆競を
乃てたるう先イの方へ往て仕まひましたハ　最へ霧吉さん
ハ眞このう弱ひく　つるへ十二眞やア仕るひヨ今千代吉
さんが火を何根しこといつてお呼ごうら手挨投をする

中に遅くなつたんであります。まほはまアせうなひか法美さん
とお琴さんが所だつた。妾でひいく言て居る。薄に豆の
早ひといふは宮に悟らしひ掛ごヨ延法美さるん月仕
真にまるからお待といへばねへ　真「アハ……妾が小音と
いつて豆の運びに遅速がありも仕まひ妾ののちいさい
癖に豆が早いとは此二もいちらるひノウ　義「イヤ先利から
くだらねへ支だろう各々に言から可笑いトキニ燭草を
呑たいノウ火をちらへ度ものだ春と遣門て菩薩の

茶屋もうしやでさへ休んで居るし　真「みなにる門ても見
世を出して居るのは我勝茶屋だろうだ　義「コウく三圍
の寺居の坂に出て居る二軒の菩薩の茶屋を我勝
茶屋といふのは向ふ鴻の通言で遠くへは通らるひぜ
真「イヤそまはいくが烟草が呑たひノウ其命寺まで不自
由するのか　義「ゆしは支の闕るも結ばる物ごと自由
過るのは悪ひのサお茶だろう今日は不足るしごものラ
真「ヲヤさんだ所で以異見でおそまに入つまれ志らしその

代アニ此るの船中のお膳言ゆハ私をあまりせきつこ
ぜト互に何か恍惚のたるしを請ひ兼させつ歩行向の
方からお津美お琴ことへ氣人さん早くお出成なれ
私きやア氣人を負して又迎ひに来たハナやくマア下へ
おゆるなねへト其命寺の裏門の所太子の下の陳に
ライて居る　真へイヤハヤ大きに此苦労なとうこのウ　爰へイヤ
お津美さんもお琴さんも二個ながら急ぎもなく薄ぐ
のと菓子ヤ何かを喰こゞる所ハ何根しても姉妹の根ぞ

のう　又代アニ此へお琴さんの意延きたるヤアイ〳〵　ことへ又代
吉さんの事麻ヤ引イ津美さんが先へお出な元人法
殘してお畳りヨ　つゞへアお待な今櫻様を買て貰つて
まことからまこと垂迷をして歩るハナ　ちよへ落吉さん〳〵
サ早くお出なヲヤ〳〵何ぞ人爰さんとおかしへ至爰ナニ〳〵
あまたハ迷惑な落さんが居ゞるハフトコトひながら歩行
いるへヲヤ〳〵私きやア夜変ゆも嬉しへヨト言ながらこなく
堤の下へおつるさへ一度にぞろ〳〵掻ひ其命寺へ迭

入り 雲言ハ 鞠の宮 精大明神の 祭れて ぎゝ 居て
「まことに〳〵 野居りくさい 早ざね人 竺元女が 竹御
宮人 願様でも 乃 成 爰「なぜ〳〵 宮「アノウ 交ても
此宮ハ お目さまを 蹴鞠にしてゝ ゆふさぎ 豆の 進
者なお 人でありさらかと 思ひてサ 真「ウムなるほど 夢の
元より 上る 月 渡り 爰「今 冥 元婦の 幼 急のを 吟て
居りと 仰 様も 復の 皮がよぢまる 様に 可 笑ヨ 「サア
お 私は成ナ 至ト 黄 稀の 本の 所を 通り 抜 なら 見て

居まバ 爰「ヲイお 浮 交さん 此本ハ 黄色な 様ごぜ 知て
居なら 「イエ 知りません ハ 花ぢよ〳〵といふ 小本ゆも
記てあるまゝ 爰「アハ〳〵 仰の 更と 此方 よりも 乗
ちかチ 真「イヤモシ 嫌さん 別なりて 為る 本なら 花が 咲のか
と 思ふと 猶 なりしい 様ご 「ヲヤ 今ハ 冬らしい 枯て
為まれハ 爰「ハ〳〵 イヤハヤ 是も 此も 口のうちに 見
女どもごナア 「アノ 爰さん 枝を 折て とりして 見様
なるエ 爰「大 仰をまるのご 「アレサ 此本の中に 黄色イ

櫻が這入つてゐるがめけて見根とゆふのサ　真「アハヽヽ
何根もくだらなくつて餘程おかしい　義「ハヽヽ一る様に蒙
のだろ思惑のがつまらなくつて困るぞ何根も打第完蓮
必ず思理屋をいふから　おもしろひ　義「サアまウお出なさら
なひ人　孫「アヽ暮らふにエそまだけまとも今日は何だろ
私達の書るのを一々笑ハまる様だにエ然と元女が老
寒におかりヨ　真「アハヽヽ今日もなひもんだ例でも
くだらなひるのだろ　どアト言を聞より手代者が十面に

成て　孫「ヲヤ何時私がくだらなひ支だろ言つて居ま
せん何事を相談しても　お茶さんとも毎日不分解まと
だろ言て私をだらしと居る癖に　まつくとれからハちつと
おつかりして高勝なことだろ言ふにへ義さん　義「今交が
能そまがいて　真「ハヽヽ　そまに見たがいて則思惑を殿ハ
おそくだらなひ　孫「よいヨ思惑でもくだらなくつても何
根で私ハ一る様だから詮方があるまません　兎でも　お茶
根に能登明に見てまた根といふのハ私の女理だから能

見えたまひでもよいヨ真そして誰に能見られたまひ
のごト言を側にて国にかしき 辰「イヨ〳〵真さんがさとし
是麻方にまいりて来やしこれ〳〵 「サ宏早よく
亦交婦喧嘩をおそじゐじやア爲ごヨウ 辰さん早く
仲人に這入りてお呉 成ヨ ヲ本〳〵 本〳〵
看官よろしく私を付たまへ他見にこうらぬ憂苦
勞が斯る抵びの中にもありて興しひるまと嫉しひ
すのまでるが恋の常なるべし

第四

住べきこと浮世なりけるを他所ながら思ひし侵の山里も
うなと最も愛ることよしこうらじや萬のるも他見
から思ひに変るものぞかし然バ和代若真次郎の
物思ひその風情まりせぬ苦労のありぞとハ見へても
二人でする苦労交婦喧嘩と戯とにもいつて変せ
暮しく亦思ひ然に繁茂の弟のこと越方の憂歌き心
世に急度存命居るのこならば後々ハ周運出世の

身をありて同出度再會まる初めりかるらんに安堵して
行と松土山なる觀光の教ハ如何ぞ難船とかるに從ふ
海の波流まで行家ハ加るよしなく万に一つも命ぶのて
此世にあらんに此方の案じを案して其紙に花脚の便を
なさゞる様な人にてなし墨文に氣の付牛屋にて今
まで音沙汰なき古文ハ十札一牛の臭なりとも國を離て
漢土の諸子天竺上ならひ所ゟ千里二千里海山を越へて
滑稽ハ所にて驚義をしてとて居るならんと案じ

るしハ婦女の情まかる食當を事ハ身ひとなりも
深き哀の間媚門の妓女でも喫女でも迷へばなるに
處女氣の誓しハ意のうき思ひ義をて誰か白髮の
森に近づく其行しも詩ハ言らんに向ふより舞
機嫌の四人連他見うまらんに田舍屋なれも様ハ
連歌に

「ひとてかくらんにあるなかしに君にて早高い
歸宿もひきて居らうとうかしてとあたき

円の側を率度あき　へ何様も此二も安宝が
知れるのヨ　さまへ吏じやア不可喜ねへ何卒とやく帰り
だと能けれども私をもわんなに慈悲がつてお呉の
栄さんどうらお左でなつて手前ぎくない様に おもひ
まほハ私でさへ禁うどものをお母さんの仰ヤア
何様に出しうらふと おもふと泣出し度やうになる
時がありまほハ吏でもお母さん松土山て墨をとやら
を見てお黄ひの時。まうらぼ栄さんの便りがあれ

其時にハおもひ寄らぬ僥倖なことがあるからなん
でも仙静に時分を待とお言ひドやアないへ　へ
視光さんのお言ひのじやア変て男の身に別条
なく久何で善ひがあるトたしうにお言ごから言ひ
あるまいらハ思ふけれども　こゝへ　お見なさい禁
ちて見ると遅くまで早くまで栄さんに遅くまでない変へあり
まへからあんまり気をおもしぐなへヨ　髭にさいしを
悪ひからヨト歳ハゆうねど明發者お芸がこうを

文川亭可充

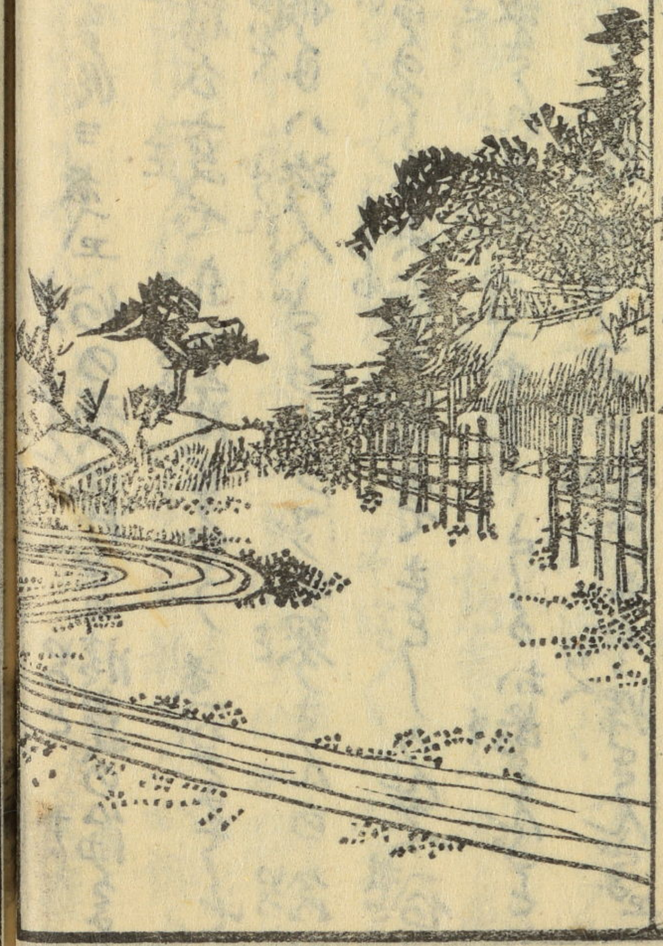
あぐさむるやましき言葉は君吾も志ぐしハうさを
ごまされける行しも四人つる おくまて歩行し 後次第
後へコウ 君吾ぎん 手根なに先へ往つても面白いものハ
ないぜ夫より跡へ帰りて平岩とでも志やまし様じやア
なのぞ。エ真さん何様ぞね 真へ なるわど手方がかへつて
言計ごらう 後へ そんなら夫と様やせうト是より
平岩へごやくと這入り 酒肴などよきわどに 跳へ
わどなく重るのとなる 後へ サアく 流容が今日ハ欣

食のみつくらをまるのごヨ つるへ 膳しいねへそんなら
お浮気さん 平岩の版槌の底をたゝいて坐うねへ 「アヽ
お茶そんと 私きやア お酒ハ 嬉ひごしまるうらねへ 〃〃〃
後へフン 能変せいつて居るぜ 猪口で呑のハ嬉ひごらう
ちよへ 〃〃〃〃 お浮気さん 海老屋の大乗じやアどふぞエ
まま天なふ樂を おちのわることなるべし つこへ 然うサ おまつしろけ子エ 〃〃〃 真へ「ド」
そんなら 霧吾さん 鳥渡 嬉ハまやせう つるへ ヨヤ大な
お猪口でありまほねエ 真へ 猪口じやア お気にいりや

せんかな　つる「イエ　おれに入るて　困りまほヨ……ト
言ながら　猪口を手に　をまバ　其吉ハ　側から　ほよ「ハイ
お酌と　言ながら　大きな猪口へ　酒を　渕濱つぐ　つる「ヲヤ
まア　大そう　強ひ　お酌ごねへ　後「ソレ　露吉さん　酒と　重
殺か　一所になりてこがまるぜ　つる「ヲヤ　恨く　此神さんぞ
此産　まほトサ　……　ちよ「ドレ　そんなら　此お猪口ハ
お琴さんにあげやうねへ　とよ「ハイ　アレサ　後さん　お　縁な
まろちやア　不吉ませんヨ　後「何故く　つる「ナニ　此廣ハ

頼酒であります　ヨ　後「エ　何の頼がけざエ　情交の節かな
つる「まア　無様な　交で　此産　ませう　後「ハテ　そして
その情合の　損手ハ　誰人　どちらうかマヅ　お琴さんの　気
男どからト　言ながら　真面な　頼ゆて　きとしかんが　後「何
様もかんが人　出されない　つる「……　とうお　前そんごと
言ふことであります　ヨ　とと「アレ　雪アな　嬉さんざエ
後「ホイ　おまハ　志くじつさ　おしのる　妹しひ　思ひをみさら
つまらねへ　何の　交ハなひ　美を　見さやうぶ　「アハ……

ヲホ〜〜〜ト見よりごんく重のうぎ うさなりて 流露
真を僅かし其日ハ船にて戻りしとぞなり



歌まはりの変へ火の用心インリ 柏子木の音カチカチカ
カチ ちよ吉へ真さん ヨウ四ツごヨまだ帰らぬとよのらう
ウ子ヱ 真へ十二まア 縁ハチ 先刻吉どんに酒代を振ら
せて 重さから 縁時分にやア むかひに 来るごとらう
ちよへ 然う 久へ そまじやア まだゆるりとして居ても
縁ねへ そうやア そうと真さん 真へ なんだ ちよへアノウ
お前 たんハ 先刻 いつて 変を 何様して お呉なさる人
真へ 何様してと いつて お前も 関分の悪いもんだぜ

見が何もながい別まになりを言ふのじやゆなし出
年と一年も立国にやゆ降るのぞハナ　ちよ〳〵イヱ
お茶さんハ旅へ往くのを考へにして見切り私の方
へハ急度お出なさらないものを　真へ十二法まらない支を
言ふぜそんな気で居らまるくらゐなら何も苦労
にやゆならないけまども自慢かハ知らないがさあハ
お茶と何程右程といろ〳〵思案をあて見まじバ
どこも国舎人往つて来ねへじやゆ金の都合もころし

二ッにやゆ本店の用も兼て居るから是非往なくちやゆ
ならないからかならずに悪く思ひて呉なさんなヨト夏を
こけたる男の言話　五代者ハおもはまも国にもつ涙
さらく〳〵男の膝に寄り添ふて　ちよ〳〵真さん堪忍して
お呉んなさいヨ勿体ない　お茶さんをうたが行たのハ私
の思ひとやらでありまたらう何卒おともたくとも
あて復を無ぞに　お呉んなさいヨ　真へ何程して此程な
可愛女房がおこまるものか其とそ此方が罪がおこ

らア ちよ〔アレ〕事 何故 あんなにやきしいざらうまエト
身をあらはして真次郎の顔をチット見つける
おしも路次を通る人の宣音
バタ〳〵〳〵

秋色艶麗 處女七種五編巻之中了

秋色艶麗 處女七種五編下之巻

江戸 爲永春水編次

第廿九回

咲初る花の都に狩近き 嵯峨の辺りに一撰の別荘を
あつらひて 庭にハ加茂の流れを 春ハ嵐の山の
揺にたゝむ 秋ハ小原の 奈佑と四季折々の風流
佳景 寝に浮世を住別しハお花が祖父の福右衛門
とて今ハ六十歳を 稍越へて家業のことハお花が変

福右衛門に歩まりせ其身ハ此里に引ちり名も栄壽
と改めて楽隠居の身となれども惣本家の隠居なれバ
出店の者も暴暑になるゞ日々の辭用ハいふに及ばず
四時の夜頭もそれくに皆福右衛門方より仕傍けれバ
栄壽ハ只花鳥を友にして楽しき月日を送りしに花に
嵐のうれひありて福右衛門ハたゞなども黄泉の鬼と
なりけれバ店をゆづるべき人もなくされども一度隠
居せし栄壽のふたゝび浮世の花にまじハる事を

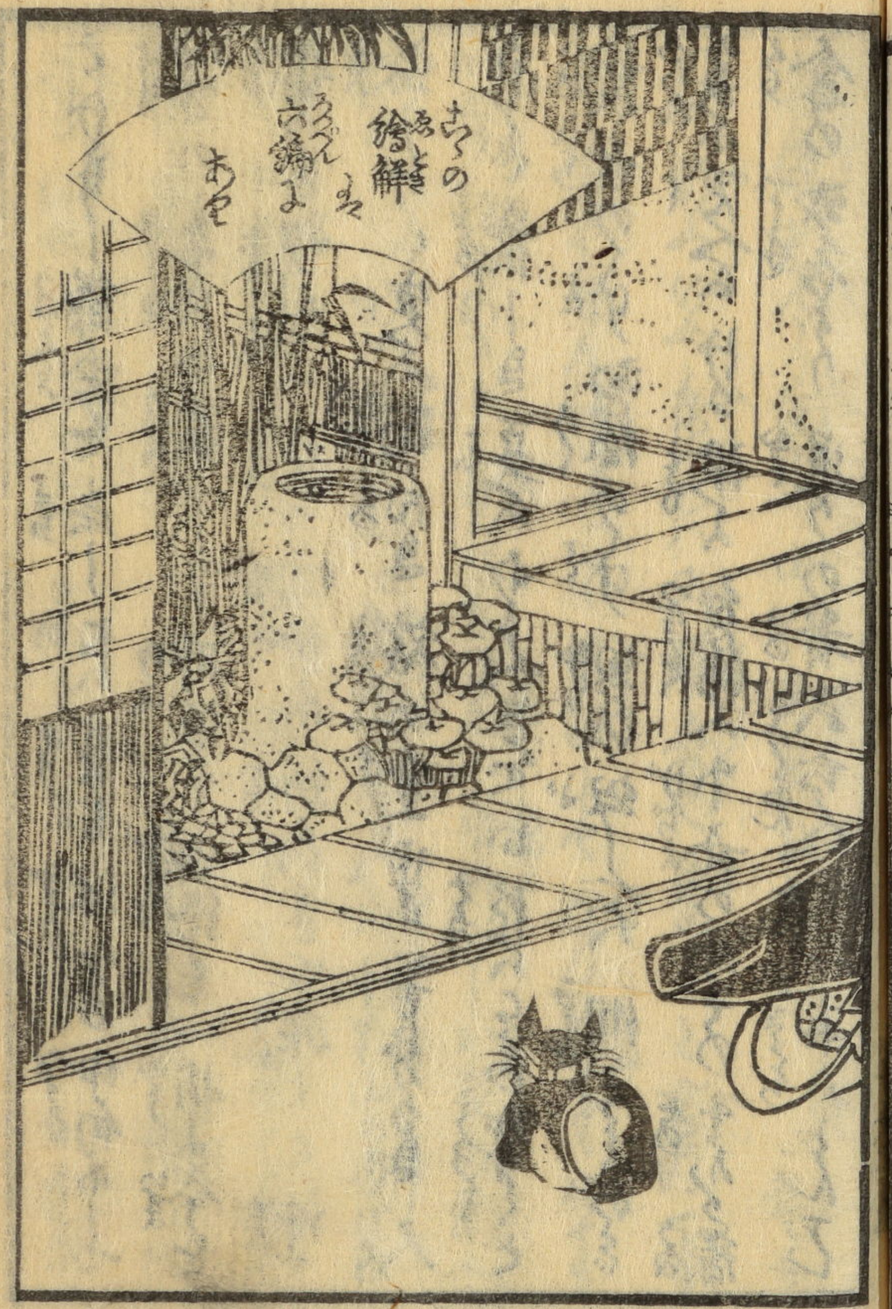
好まず店ハ支配人に歩まりせ並しに此ねどふとお花の
鎌倉へ欠落せし根子を聞けれバ栄壽ハ支配人のたち
らひ悪しく私欲にふけりし事を大きに立腹し雲なる
本家にいたり支配人を呼つけてだんくの委細を弱
けれバお花と簑吉の事を尾に尾をつけて悪根に
言けれども さらに義引せず此たゞお花が欠落ハ
皆其方達の私欲より起りしことなりたとへ
お花の身に不義いたづらがあれバとて其ハ本も

子細なし何故と言へバお花が身ハ先達て聟をも
取てあるべき身なるをお花が嫌ひけれバ其侭ニして
善隠居同様ニして過るなりさりとれど蓑吉と
やらずが所ニなりけるしかるバ其者を聟ニしても子細
なき事なるを此栄寿ニも相続なり蓑吉をおひ
出しあまつさへお花まで欠落させしなれバ皆其方
共の不所存より起る所なりと理の当然なる
栄寿が言語ニさすが女智の支配人もおそれ

入りしありさまなりけれバ栄寿ハ忠義にして実体なる
身代ニ言付て支配人させしの者の謝も残らぬ眼を
善く悪より番頭身代を預ケの作者とて支配
人として叔栄寿の言けれバお花の縁を鎌倉へ欠落
せしより上ハとても帰る事ハなるまじ在所にある時よ
お花ハ家の悪風にて殊に本妻腹なりけれバまの
当時家の身代を三分二を鎌倉へ帰りてお花と
蓑吉に支配し其三分一を渡りて此店を持

まへし聞りますれバ鎌倉を本店にしても京都を
本店にしても何方でも更にかはりはなし
それよりもお花に逢ひて能く役者が芝居をも
聞きねうちハなかりしひ稀に幸ひ鎌倉見物かたがた
栄寿が供をしてまゐらしく洞実と言けれども忠
義なれども元人一滴ほどもおよばざる左衛門が居ま
すまじくハお花きまのお憶偉と申まする栄寿ハ
猿楽の利益めくの人目かくし京都を貪遠し

鎌倉さして急ぎける
役者白猿贔屓ハなまじお花がお染の役居に
申ふらして居る時分の事なりと知る人
是より末ハお花が鎌倉を繁盛せし後の
物がたりとなりて猿まる人と積ふのも
吾境おもはるゝ日より出猿が隔ね縁切と蓑
去がが実情にわけ人ゟ其身の恥らしく先一度ハ
都へ登りて角にも芝居へしと知らさでありき


さくの
ゑとき
繪解
まで
ろぐん
六編よ
あを

さげまし鎌倉を立し日ハ春も弥生の中旬にして
四方の乗人の罪しく野辺も山路も一様に今を
盛りと咲る様に花の咲雪に神ねまして雁しと詠が
様ドけん実に面白き猿の堂世に苦労なき人
なりとも棄しき事にあらざるを お花ハこの替くと
蓑吾のくりお孫のくり思ひ出して泪ぐるいとゞ
長に見へにける供に対孫に下女の如きの手ゆる鎌
倉の鎌倉より送りの者又六人 あ「喜八どんアレ

鳥渡お見よ向ふの山の奇羅なおしをを 長代兵八「参りサ
ねへ 都ふ いふ 乗人ハ又鎌倉で見ゆうと言ひても
見しきや せんよ あ「アイ 分れして迎ひ行ても 伝ても
叶やア 仕ないヨト言なぐら 先へ歩行しお花の側へ
寄り あ「お花さん 工 鳥渡 まア 方くの山の景色
でも 四洗ドまして 桃や 桜が 寛に笑羅く咲て
居りましヨ なる「然うか ト言つてなり 俯向て
居る ゆふ あ「アレサ そんなに考へて なり お吉な

さうと又お淫梅が悪くなり其ヨ私なんざ
気に苦労がないもんどうら嬉しいなりやおもしろい
更ばかりのりて些とも申しひあとなんぞハありま
せんハ更どうらお孫さんもチット気を大きくお持
なさいヨ　まあ〳〵申しし気楽なことばかり言ふのふ私
ハ何様も手様な気になりとくらてもなりたいヨ
まあ〳〵十二なら是なりハ在川屋ませんハ子私しやア
此度の川屋中ハお同出度とおもりて居りまいヨ

何故と私作まし京都へお出なさて川て種々に出来ぬの
う人蓑さんを京都へお呼なさるか其ほどなけるやア
お孫さんがまた藻倉人お帰んなさらて蓑さんと
此夫婦におなんなさるか何是に為ても能るけでご
ざるまいヨ　まあ〳〵然うごと嬉しいけれども迚も
左様なるこのちやア　なりいヨ　そのへイエ急度なりまい
私しやア人に関ましたものを　まあ〳〵ヨヤ誰人かそんな
事を　お孫に言ひたエまたお園が私を侮して断で

笑ふとおもつて勝らしい　その「ナニ　お前さんを傷ハ
いたしませんヨ　丈とも　空ごと　思ひまたなら　堂になき
いまし　私ハ　喫ふ　夏があり　まほ　けまじもやませんから
なる「アレサ　誰も　空ごと　言切りハ　為ないハま　その「そん
なら　葬気で　おつアしな　お顔を　在成ちやア　声でお
ざれ　まほヨ　なる「アく　為ないから　謹が　何と　言ひたら
話説て　お　喫せヨウ　その「ハイ　左根なら　お　話説もかし
まほが子　実ハ　お　出店の　国那が　在　作ましたが

今度　お前さんがアいふ　紙になりたのハ　出店の者が
行届かなひのごから　何でも　我等が　骨を　折りて
見　非　簑さんと　お　前さんと　也　更　婦ふ　為ないじやア
ならないと　お　話説の　在　出座ましたのを　私ハ　幸　去
喫ましたヨ　なる「アノ　実　正に　然う　お　言ひごろ　こへ
その「ハイ　お　嬉しう　在　出座　ませう　子　なる「アくト
言つたぢうり　嬉し　そうに　完ふ　笑ひ　なる「傷ごと
喫りないヨ　その「アレ　モウ　うたがひ　添ひも　程が　あり

まほヨ　あ〜〜〜〜　たる〜　そまどつて　お前ハ笑ひなぐら
言ものを　その〜　ヨやく　おまハ　古ケ爰　夫じやア　殘人に
森八どんでも　頼ミ　ませう　ウ子エ　たる〜　アレサ　そんな
夏を　森八に　言つ　ちやア　香ごヨ　森八〜　ヘイ　何ぞお屋び
なさゐ　ましたらへ　その〜　あ〜〜〜〜　ナア二子　今夜泊る所ハ
何処ごと　お花さんが　来　作このサ　森〜　ヘエ　左　招で
来　出座　まほ　ウ　今晩ハ　府中　まで　まゐり　ませつも
つまでおざゐ　まほ　お花さゐ　ハお　草外　なさゐ　ましたら

然二　お　鶯　にでも　言ませね　たる〜　十二　まぐ　草外　やア
為ないヨ　そして　鶯　より　歩行　方が　気が　晴れて
往ようだハ　森〜　なるほど　夫も　宜しうぞざゐ　ませう
そんなら　お　圓じん　往く　気を　つけ　もよしや　お　長ヨ
その〜　アイ　今日ハ　何時に　ない　出機　嫌が　往ヨ　何の　招し
てもお　守り　役の　汲　冨が　往　ウ　子　たる〜　あ〜〜〜〜　独で
自勝　にして　居るヨ　ノウ　森八　森〜　ヘイ　あまでも　お花の
紫　昇り　紫　三の　気　どうで　居り　まほ　へ〜〜〜〜　その〜　ヨヤ

茲八どん おがんてお主ヨ 既に 宿人つくとゆゑ 同に
あハせてあげるから 茲へイエ そまハ大きさまさ 茲の
折に 夜ごよし 縁いで 寐 うきなひ のハ真らぴら
四光ぶ 茲へ 中ーーー 茲 ハ 余ぶどおまつて
のウ 茲へ ヘイ 生まそ そじめて めんな 鮮や 寐 を
関まし さるんでも 鯨の 鮮の 折で ごさる ましと
まなくへ 中ーーー アハーーーー ト たゝひまさ なぐらたゞりゆく
野辺の 日 朝ぞ 吉宗なる

第卅四

新説も 府中と 変えしハ 相撲 武蔵の 釈路に
志て 海原第一の 繁栄ハ 鄙に まれなる 家造に
軒端 ならべし 旅籠屋の 掛行燈も 賑ハしく
往来の 旅客の なやミなき 実に 太平の 四代の
来 皆万歳とうたふ なるべし 這回に いづれの
旅籠屋なるか 奥の 一間を 借り 切りしハ お花の
群の 古人連 その へ お花さんへ 今日ハ 余程お出行

なまいこうら 陰 お草外 なさゐ ましこらう 「アく
宿人 若こう 大そう 草外が 出こ 出り ごヨ そなやア
そうと お園や 「ハイ 「アノ 先刻 高波 見う
けこ お方ハ 何様も 見こ 人の 様ごのゥ 「アノ
隣座 愛に 居る 坊さんで ざゐ まほうへ 「アサ
大きな 於ちこしてハ 悪いコ 暗 かつこうら 志つかりこハ
顔が 見人 なんご けまども 知よりと 私の 病気の
時 助けて 行ひこ お医者 さゐでハ あるまいり 「なる程

然う 行 作と 私も 見 おぢへのある人で ざゐ ま
さヨ 左様なら ちよつと 空て 乗り ませうかねへ 「夫
でも お名ハ 志らぬ どふも 空様が ない ハな 「十二 お花
さんと いふ 人の お塩 梅の 悪いとき お直しなさらて
行ひこ お方ハ 貴 公で ざゐ まほうと もふして 見
ませう 「ホ…… そんな 夏が 言ハまるものかナ 「十二
旅の 私ハ うき 捨と やらひよつと 月遠行こ 時まい
私が こらハまる だろりごろう 能う 行 此産 まほト

言ふ打から隣産婦より仕切の襖を明て へイヤ
お前ハ富増屋のお花さんで此座ましこう大
きにお見そまもふしましこト言ひながら此方へ
這入る人影にお花ハおどろき振り返り顔見合て
完爾笑ひ なるへヲヤ貴ハ公ハ去年私の大病の時
分此恩を身に御医者さんで此為入まほ子宮に
不思議な所でお目にかゝりましこ いや へ然まだサ
私もあまりから乙絵常陸の国をまハつて此度ハ羅

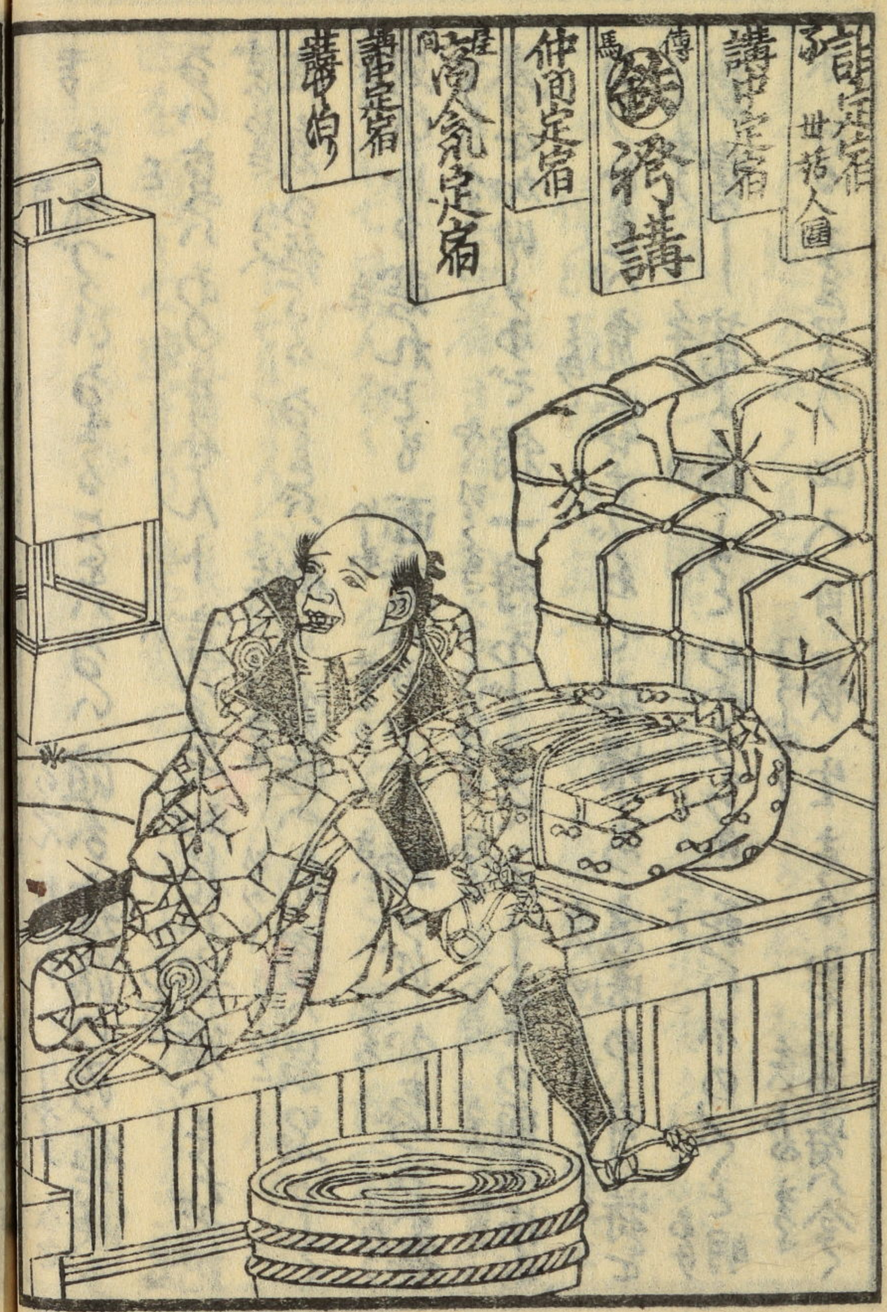
波の方へ往うとおもりてる なるへヲヤ左右で此座
まほ久夫ばやア丁度能うござゐまほねへ私も京
都へ乗りまほから いやへハテ子そまじばやア能ほ連れざ
なるへハイどふぞ此国屋に身を引て此下まし然うこと
私も知識くつて嬉しふござゐまほハト話況の中に
歌の交るにぞ及ひに屋の労をもあまハとて流客
外房に入りにける手比ハたや初歌るて実の別をき
妻の歌に廿日の月もさし登り雨戸の端を

ある親のぞつと身に志む侘しさに お花は兎に
角眠らまじまさ おもひ出に東都のこの頃今比は
お源と簑吉互ひに実をあつし合ひ仲睦まし
暮にべし今夜は如何なまやらん今は何様して
居るさとぞと おもへば猶も眠らまじ溜息ついて
居る折しも俄に家うち騒しく針よ灸よとひく
めくゆぞ お花はお園をゆり起し何事なるぞと極な
を安かせしに此又六日以前より表産愛に病気

にて遁留して居る客の俄に病気重り早息も
絶ゆるだかりなるよし猶委細く弱ねしに京都の
富増屋といふ富家の隠居なりと言ければお花は
驚き富増屋と言へば知がりなりと直さま表
産愛へいたりて見るに おもひしに遠ふだ嘆哦の
里に隠居なしたる栄壽なりけれバお花は猶も
仰天し涙ながらに側へ寄り呼べどさけべど其
甲斐なくすや更切まし有様にお花はあきれて

忙然と途方に くれて居たりしが 何おもひけん
お園に向ひ なるへお園や宮ふどふせ 不吉かハ知ら
ないが 倅ひ奥の産婆へ 私の病気を 重してくだ
さらこお医者さまがお 来るさる から 高渡お母あふ
志て来て呉んなく そのへなるわど おまへ 能い所へ お知が
付ましこト そまつよりお園ハ 奥産婆へいたり 彼の名
医を頼こて 連来り 栄壽の 容体を 見せけるに 彼の
医師ハ しばらく考へて 居たりしが お花にむかひ 丹二

モウ お気づかひなさるとよハない 随分 療活の為 稽で 快ふ
ない 夏ハ あり ませんト 言ハまて お花ハ 安堵ハ されど 況
在息の絶たる なまバ 側に 付添ふ 尻客ハ 最いぶかしく
思ひける 然れども 医者ハ おしも 強がぼ 公しづかに 療
養を加ゆるゆゑ 稍一時 わどるて おし息の通ふ 様に
なりけまバ 尻客 たゞめて 安堵しつ 名医の 寿特を
歎賞し 菓よ 湯よと いふうちに 夜ハ 不のくと 明
にける そまつより 四又日 養生 まる ゆゑ 栄壽ハ 全く



講中定宿
講中定宿
仲間定宿
講中定宿
講中定宿

快方におよびしかば先お花が此度家奶人のゆる
よしを委細く関そまるらば家奶人往くにハ及ぶ
おまより直に鎌倉人引ひ入し先方にてゐらるの
相談を為べし言けまバお花ハ栄壽が底意ハ
知らねども鎌倉へ帰る支の嘆しけまバ其用意を
急ぎ彼の名医何某ハ厚く禮を述て同ならぬ
東路人おもひきしとぞなん

作者曰おまより下回ハ六篇を綴るの文績なれバ

物語二段に分るを知るべし

這回にまた栄壽帝ハおもひハ大船にまとけらまを牽く
西園にいたりしかど一銭の駄へもなく身につくものハ
古布子ひとつにて何詮さべもあらざりしを船段の
情にて いさゝかの路銀を貰ひ大坂への便船を雇て
夏も所月の中空に難波の浦に着しかど愛にも
訓染の人なければひと日ふた日と送るうちこづかの
路用もつかひ切り今ハナヤ詮方つきて宿を借る

屋きたよりもなく今秋ハ如何に凌がんと天満の
何家をあちこちと歩行ともなく往くあどに秋ハ
丞満になりにけりかるおりしも向ふより息せきたせ
来る一人の未通女おもひぼハ夕と行當り「アレ
四免なさ行てくださいまし 栄「十二おこがひだから
何もあやまんなきる事ハないト言ながら腹の姿を
見て 栄「モシ お前ハマア 秋 秋中たれさ一人で何事
お出ぞう知らないがひよろと悪漢にでも出合とぞんな

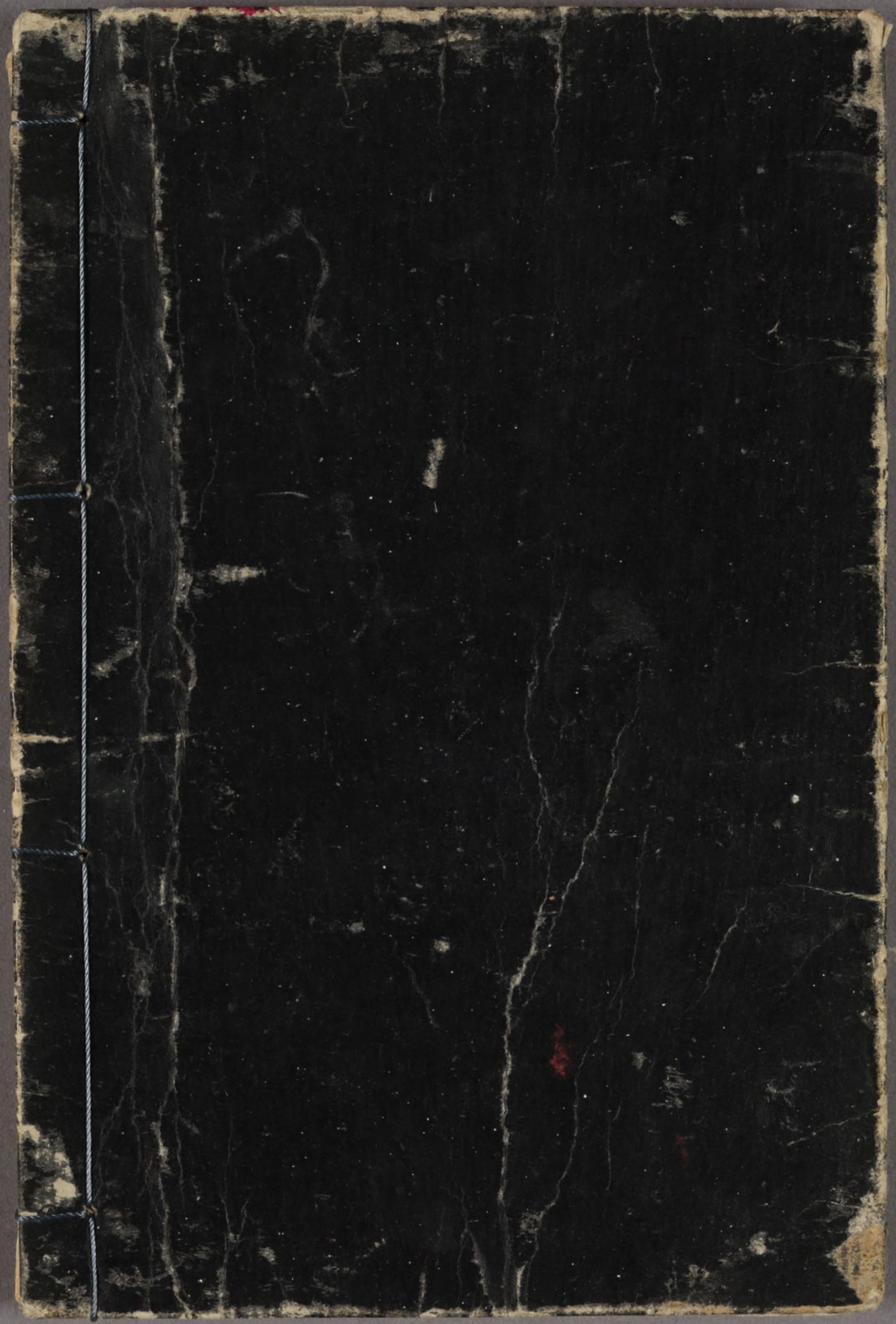
目に逢ふか知れまいにト言ふを聞より娘ハ常に
家の人家の悪漢ならざる事を知りたるにや少し
安睹考たる様子にて 秋「アノウお前さんハ何方
のお方かハぞんじませんが私ハ只今悪漢に出合
ましてお顔も帯も乱らまさうへに私をつかまへて
悪いるを為様と仕ましたのを漸くの事で逃て
まゐりましたが何卒お前さん少しの中ここらしを
何所へでもお隠しなさ行て 秋下まし今に跡

から退かけて来るかも知れませんト言ひ居て
栄次郎ハ當惑顔されどもやきしき生れゆゑ
栄へなるわどそつもやア お周りごらう志かしお茶を隠
まといつてもどふも此地の勝手を知らないから
仕様がないト言ながら四辺を見まハし 栄へあすこの
川に筈のふいた船があるが中にハ誰も居ない極ぐ
からマア あの船へでも隠れるサト いひつて赤通女を
ごもないて船の中へぞ飛び乗りける必竟これなる

娘のなりゆきいと面白き物がたりあり六篇の發行
を待てよろしく高説を願ふよなん

作者 爲永春水

画工 溪齋英泉 泉

筆耕 瀧野音成

秋色艶麗 處女七種五編下之巻了